
多分、初恋だったと思う。

鷹野こえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

多分、初恋だったと思う。

【Nコード】

N1557F

【作者名】

鷹野こえ

【あらすじ】

よくわからないけど、あれは恋だったのかもしれない。夏が終わりにかけていた日。

親切だと思う。

きつと、そう、もしかしたらそうかもしれないという至極曖昧な話なのだけれど。

僕は知らぬ間に恋をしていて、それがその日その時、終わったのだ。

まあ、実際のところわからないけどね。

台風の日だった。

9月も大分過ぎて、中学生の僕は明日に迫る月曜日——つまり毎週当たり前のように来る、学校に行かなければならない義務教育制度を嫌々ながらも思い出される大体が憂鬱な日——を、迎え入れようとしていた。午後6時。

向かい合うテレビの中では一方的に世界の平和を哀願し熱弁し、拳句の果てには人任せの道を選ぶ王様が偉そうに叫ぶ。「では、行つて参れ勇者よ！」そこで承諾する勇者もおかしい。

そして、そんな物語を進めていく僕もおかしい。そのことに僕はあまり気付かない。

プルルルル

聞きなれた機械音が耳に届く。

それに僕は少しの苛立ちを覚えた。今ほんとうにいいところなのに。

母はまだ友達と出かけてくるといったのから帰ってきていないし、僕には快く電話をとってくれる兄弟もいない。ひとりっこだから仕方なしにとった電話から聞こえたのは、女の人の声だった。

「もしもし、山田さんのお宅ですか？」

山田とは紛れもなく僕の苗字であり、父の苗字であり、母の苗字である。僕はこの苗字を気に入っていない。山田なんてありきたりすぎるし、なんかダサイ。

誰の声か思い当たりはなかった。けれど同年代だろう声的に。そんな人が何故？

僕がそうですと肯定すると、その人はこう続けた。

「あの、財布を拾ったんです。名前とか、電話番号とか、その、書いてあったので。」

「はあ、えっと…茶色の財布ですか？」

「はい。はい、そうです。」

「じゃあ母の財布だと思います。」

「あ、そうですか。えっと、それで…」

——住所も書いてあって、それ近くなので、わかると思います、から。

つまり、届けにくるということなのだろう。世の中には親切な人がいる。わざわざ電話かけてくれたりね。

これが高島美春とのファーストコンタクト。

女の子って感じの名前だと思う。

：母は財布に住所と名前を書くのだろうか。

名前は10歩譲っていいとして住所も書くのは、ちょっと。

うわ、だったら俺はあの拾ってくれた人にとって名前と住所を財布に書く奇特な人の息子という第一印象なわけか。

ちょっとヘコむ。そして気付く。このときの僕は、まだ高島美春の名前を知らなかった。

名前も聞かないで家まで届けて下さいってどんなんだよと更に少しヘコむ。

その前に財布の中に免許証が入っててそれで知ったのかもしれないと気付いてくれ。

ともかく俺は、いいところで止めているゲームに向き合った。

なんとなく集中できなくて、面白くないように感じた。スイッチを切ってからはソファに寝転がり、今の電話のことを考える。

断っておくが、この時点から気になっていたとかそういうわけじゃない。

ただ、女子と電話なんて普段しないから。僕の気持ち的には、今の空模様のようにざわついてた。どしゃぶりってわけじゃない。なんか、台風ってテンション上がらない？そう、おちこんでるんじゃないって、ざわざわするの。

ぴんぽーん

どれくらい経ったかは知らないが、変わり映えしないチャイムが鳴る。

なるほど拾ってくれた人かなと立ち上がる。

僕は平々凡々は男子中学生なものだから、少し、美人であることを心の隅で期待する。そしたら素晴らしいロマンスがある筈だと考えた。

所詮妄想だ。

がちやり、とドアを開けるといるのは、やはり同年代くらいの女の子がいた。

顔は、特別かわいいわけでもないが、平凡というのだろう。

目がタレ目がちなのが少し気になるかもしれない。ちょっと残念な気持ちになる。ごめんなさい。

でも、この台風の中たいへんだろうこの人。弱まってきてはいるものの。

あの、と彼女が財布を差し出そうとする前に、

「とっ とりあえず」

と僕は声をあげる。

やばいどもった。落ち着け。

「玄関、入って。雨、すごいから」

言っておくが女子と喋り慣れてない世の男子中学生なんてこんなものだ。ぼそぼそ喋ってしまうんだ。仕方ないだろ。しかも初対面の人なんだから。うまく喋れる奴はチャラ男だけなんだ。

女の子は、「あ、はい」と玄関に入った。
ドアを閉める。

そこで気まずく沈黙になりそうなところ、また声をあげてみる。聞
かなきゃいけないことがある。

「あの、名前、何ていうん、ですか。」

ちなみに僕は敬語も使い慣れていない。

その子は高島美春です、と名乗った。場違いなことに、僕は、女の子は敬語を使い慣れてるんだろうなと思った。たかしまみはる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1557f/>

多分、初恋だったと思う。

2010年10月28日03時03分発行